

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二十二主日 C 年

小西広志

2022 年 8 月 28 日

朗読箇所

第一朗読 シラ書 3 章 17 - 18、20、28 - 29 節

第二朗読 ヘブライ人への手紙 12 章 18 - 19、22 - 24a 節

福音朗読 ルカによる福音書 14 章 1、7 - 14 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 8 月 28 日、年間第二十二主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

柔和

第一朗読の『シラ書』はギリシア語で記されたものが残っています。「柔和」はギリシア語でプラウテースです。プラウテースの元々の意味は「他人の弱さに適応できる強さを備えた柔和さ」だそうです。『シラ書』での使われ方を見ていると、「信仰」、「憐れみ」、「平和」という言葉と重ね合わせて使いますので、「柔和」は「柔和」でも神さまへの信仰に基づく「憐れみ」深さと「平和」な心を合わせ持つ「柔和」の意味となるでしょう。

日本語では「柔和」を辞書で引いてみると「性質や態度が、ものやわらかであること。また、そのさま」という意味で、物腰の柔らかさを指します。しかし、聖書では上に述べたように神さまとの関わりを基礎にして生まれる「憐れみ」深い態度、あるいは「平和」なあり方を指すのです。こういった「柔和」（プラウテース）は、神さまとの関わり態度である「へりくだり」と関係します。

近づいた

第二朗読を見ましょう。『ヘブライ人への手紙』4 章 16 節では「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」との呼びかけがありま

した。そして、大祭司である主イエス・キリストの姿とわざが語られてきました。そして、その語りかけの最後で主イエス・キリストが招いていることが記されています。そこが今日の第二朗読の箇所です。12章22節で「しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり」とありますから、「近づこうではありませんか」と呼びかけられて、大祭司キリストのことを教えていただいて、わたしたちは「近づいた」のです。わたしたちが「近づいた」のは「新しい契約の仲介者イエス」に他ならないのです。

へりくだる

福音朗読では11節の「へりくだる」に注目してください。ギリシア語でタペイノオーと言います。意味は単純に「高いものを低くする」ですが、そこから心のありよう、あるいは生きる態度の意味が生まれていきました。「低さ」は無力さ、貧しさ、卑しさを意味するネガティブな表現ですが、新約聖書ではイエスさま自身が「へりくだって」十字架につけられましたし、「自分を低くして」子どものようになる人が天の国ではいちばん偉大な人になります。

11節では「低くされ」とあります。フランススコ会訳は「下げられ」です。このように受動態で記されているのは、神さまが低くなさるという意味です。少し難しい表現で神的受動態と言います。神さまの介入と考えたらよいでしょう。「へりくだる者」（フランススコ会訳は「自らへりくだる者」）は能動態です。神さまの思いを優先した人は、神さまの前で自分から低くなって、神さまに従って生きようになるのです。

まとめ

今日の福音朗読をどのように受け取ったらよいのでしょうか。7節から11節と、12節から14節の二つのたとえ話があります。たとえ話ですから道徳的な規則のように受け取るのはあまりふさわしい読み方だとは思えません。招かれたら末席に座らなければならない。宴会にはお返しのできない人々を招かねばならないと考えてしまうと、福音が少し窮屈になってしまいます。だからといって、たとえ話なのだから霊的な意味だけを引き出そうとして読むのも極端ではないかと思います。神の国で「面目を施すことになる」ように振る舞わなければならないと考えるのは、少し行きすぎのような読み方ではないかと思います。

上で神的受動態について書きました。神的受動態というのは文法的には受動態の形を取っていますが、その行為をするのは神さまご自身だというものです。「低くされる」（11節）の低くしてくださるのは神さまご自身なのです。福音朗読の最後の言葉は「あなたは報われる」（14節）に注目してください。直訳ですと「報われるだろう」となります。報いてくださるのは神さまご自身です。お返しを期待せずに貧しい人々を宴席に招きますが、それで幸せになるかどうかは神さまがお決めになることなのです。「低くなる」、「報いがある」と人間が勝手に期待してはならないでしょう。

それではまた来週。